令和３年度（2021 年度）第２回北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会　議事概要

１　日時及び場所

日時：令和４年（2022 年）３月 16 日（水）13 時 00 分から 15 時 00 分まで

場所：北海道教育庁道庁別館７階（札幌市中央区北３条西７丁目）オンライン開催

２　出席者

＜構成員：５名＞

天野哲也　　北海道大学総合博物館資料部研究員

右代啓視　　北海道博物館学芸員

澤井　玄　　北海学園大学非常勤講師（座長に選出）

瀬川拓郎　　札幌大学教授

高瀬克範　　北海道大学大学院文学研究院教授

＜竪穴群調査の実施に関係を有する者：６名＞

坂本尚史　　北海道立埋蔵文化財センター指定管理者（公財）北海道埋蔵文化財センター主査

立田　理　　同上

大石徳博　　興部町教育委員会社会教育課長

髙坂一人　　興部町教育委員会社会教育課社会教育係長

＜北海道教育委員会：４名＞

高見里佳（文化財・博物館課長）、西脇対名夫（文化財・博物館課長補佐）ほか２名

＜傍聴者：なし＞

３　話題提供及び意見交換

＜第２次調査の成果と公開及び第３次調査計画＞

事務局から、第 2 次調査の成果と公開方法及び次年度以降の第 3 次調査計画の内容について説明を行った。

・第２次調査（平成 30～令和３年度）における取組み概要を説明。北海道東部を中心とした、竪穴群の全体像の把握とその価値の説明、国内外の類似遺跡との比較、竪穴群とアイヌ文化との連続性の検討などについて、令和３年度末に公開する『竪穴群の概要（改訂版）』で報告予定。

・第２次調査における竪穴群調査は、宗谷・オホーツク・十勝・釧路・根室管内の 14 市町で実施。

・国内の窪みで残る竪穴群は、道内の竪穴群と比較すると、数軒～30 軒程度のものが多く、100 軒を超えるものは北東北の一部で確認されるのみ。一般的に竪穴は窪みが浅く、竪穴群の周囲に空堀をもつものもある。

・北海道周辺域の竪穴群については、第１・２次調査の懇談会で有識者からの報告によって、道内の竪穴群は、周辺地域と比較すると、存続期間や規模の大きさなどに特徴があることが指摘されている。

・『北海道の竪穴群の概要（改訂版）』の目次案を報告。

・次年度以降の第３次調査計画の概要について説明し、個別調査では引き続き道埋文による重要遺跡確認調査を実施することを報告した。

＜令和２・３年度重要遺跡確認調査の成果について＞

北海道立埋蔵文化財センターから、興部町興部豊野竪穴群（A）の令和２・３年度の調査成果について報告を行った。

・報告では、遺跡の位置と周辺の地形、調査の目的と目標、令和２・３年度の調査について説明された。

・調査は、興部豊野竪穴群 A 地区（道史跡興部豊野竪穴住居跡）の基礎データを整備することを目的に実施された。調査内容は、竪穴の詳細測量、ソイルマーク・クロップマークの確認、周辺の踏査による竪穴の確認を実施。

・調査の結果、遺跡は続縄文から利用され、竪穴群は主に擦文期（後半）に形成され、約１万２千㎡の範

囲に 44 軒程度の竪穴を確認した。また、本遺跡におけるクロップマークの特徴が指摘された。

＜話題提供：北方四島の歴史文化遺産＞

北海道博物館学芸員の右代啓視氏が、「北方四島の歴史文化遺産」と題して話題提供を行った。

・北方四島における歴史・文化遺産の保存と継承のため、2006 年（平成 18 年）から、ビザなし交流の歴史・文化専門家グループとして、調査を 14 年間継続。2020 年度以降はコロナ感染症のため中止。

・北海道～千島列島～カムチャツカにいたる考古学的な歴史・文化構造と、その後の歴史文化を探るために、これまでに、国後島、色丹島、択捉島で現地調査を実施。解明の視点として、先史時代における物質文化的連鎖現象や、先史～歴史時代における文化接触、狩猟採集社会の持続可能な環境と資源を重視する。

・調査よって、国後島 82 ヵ所、色丹島 22 ヵ所、択捉島 16 ヵ所の遺跡を確認。旧石器・縄文・続縄文・擦文・オホーツク・アイヌ文化の遺跡が分布していることから、北海道との活発な交流が展開。

・確認された遺跡の内、特に竪穴群については次のとおり。択捉島では、砂丘や河岸段丘を中心に竪穴群が分布。遺跡の多くは、河川浸食による自然崩壊や土砂採取による人為破壊を受けているが、縄文時代からアイヌ文化期までの遺跡が確認される。国後島の竪穴群は、河口域、海跡湖岸、砂丘、河岸段丘などに分布。主なものとして、アインスコエ湖周辺の竪穴群は、続縄文、擦文、オホーツク文化の各文化期による単一文化期の分布のまとまりが想定される。また、小田富段丘遺跡では、竪穴群とチャシ跡で構成される大規模な遺跡が現存。色丹島のイネモシリ 4 遺跡は現在の道路によって一部破壊を受けているが、擦文期の良好な竪穴の窪みを確認。アサリ橋右岸台地遺跡は、縄文中期～晩期、続縄文、擦文文化期の竪穴群と考えられ、湾奥に位置する。

・江戸時代から昭和時代にいたる様々な文化遺産について紹介された。

＜意見交換＞

（質問）包括的保存活用計画の具体的な内容は？竪穴群事業は長年取り組んできているので、最終的な課題や、なぜ竪穴群が形成されるのかといったような普遍的な価値について、事業としての着地点や展開を考える必要がある。

（回答・道教委）竪穴群を中心とした文化遺産としての古代集落遺跡群の協議会を設立予定。自治体の枠を超えた遺跡群としての保存活用を目指している。具体的な内容は次年度以降、協議会の中で検討していく。

（質問）枝幸町・雄武町・興部町の沿岸の牧草地では、4 年に一度天地返しを行うそうであるが、その際に、遺物が大量に出土しているようである。包蔵地として登載されていないところも視野に入れて調査を行う必要がある。特に牧草地におけるクロップマークを探るための踏査が必要ではないか。竪穴群の構成を考える上では重要。

（回答・道教委）これまでの調査では、包蔵地における現状把握を主眼としてきた。道埋文による重要遺跡確認調査でもクロップマークの有効性が提起されたところなので、次年度以降、調査方法の検討を進めたい。

（質問）登載された遺跡以外の状況把握も進めていくべきで、竪穴を使用した人々の暮らしや社会のあり方に迫れるように調査を進めてほしい。できるだけ多くの情報を回収する方法を考える必要があるのではないか。また、興部町豊野竪穴群（A）について、土壌分析の成果はどうか？住宅地らしきものがある範囲には竪穴が分布しないのか？

（回答・道埋文）土壌サンプルは回収したが分析は未定。次年度以降の計画の中で、必要に応じて検討。また、竪穴の分布については、住宅地東側の牛舎に遺物が散布していたようであり、竪穴が分布していた可能性は高い。

（回答・道教委）竪穴群の大半は、調査が実施されておらず詳細時期がわかないものが多い。事業予算に限りがあるため、高価な機器類を使用した調査方法は難しい面もあるが、基礎的な情報を把握できる方法については今後も引き続き検討する。

（質問）掘らずに情報を得るというのは遺跡の保護を考える上でも重要。クロップマークに注目して調査を進めてもよいのではないか。季節変化の中でクロップマークの視認性がどう変化するのか。また、クロップマークと遺構との対応関係がどうなるのか。海外の事例も踏まえて、調査方法を検討する価値はあるの

ではないか。

（回答・道教委）牧草地の場合、立ち入りが難しい面もあるが、道教委の総合調査の中で、一つの町であったり、地域を区切ったりして、調査に取り組めるかを検討する。

（質問）８箇所のクロップマークの内、竪穴住居ではなかった２箇所の堆積は？

（回答・道埋文）耕作土直下で黄褐色ロームとなり、遺構は確認されなかった。

（質問）遺構でなかったクロップマークの要因は推測できるか？季節的な視認性の変異について精度を挙げて捉えていく必要もある。

（回答・道埋文）草の伸び具合で視認したが、この認定方法に問題があると思われる。草を刈った後の、色や瑞々しさで判断する方がよいのかもしれない。

（質問）北方四島での「竪穴群」の位置づけはどうなっているのか？普通の遺跡とは異なる位置づけとされているのか？

（回答）北海道と同様に、竪穴を含めた遺跡として位置付けているが、北海道と合致しない遺跡もある。続縄文、擦文など各文化期の単体の遺跡が多いという印象。オホーツク海側については、オホーツク文化期の遺跡が多い傾向にありそう。竪穴が附随している遺跡との区別はしている。

（質問）北方四島の埋蔵文化財包蔵地の登載・周知についてはどのように取り扱っているのか？

（回答・道教委）一般的に、埋蔵文化財包蔵地については、市町村が把握したものを都道府県の同意のもとで周知することとしているものの、四島については実施できていない。包蔵地の周知は、土木工事等に際して、埋蔵文化財を保護する趣旨であるが、土木工事自体を管理できていない現状では、周知の意味も不明。現状の日露の文化財保護体制や政治的状況下では、道博などの研究機関で実施する学術調査の成果を共有するしかない。ただし、文化財としての価値を北海道の人々に認識してもらうことは、我々の目標となりえる。

（質問）サハリン、北方四島、北海道を含めた竪穴群の活用の方策を今後も考えていく必要がある。